

第二回 「資本論を読む会」

2018/10/25 TK

第一巻 資本の生産過程

(注)文中の「★印」は、どちらかと言えば「個人的見解」

第一編 商品と貨幣

第一章 商品

第一節 商品の二要素 使用価値と価値(価値実体、価値の大きさ)

資本主義で支配的な社会の富は、「巨大なる商品集積」として現れる。研究は商品分析から始まる。(67p)

- ・説明の入り口の「商品」。資本主義の「下向」分析を終え、「上向」著述する際の「入口」。
- ・社会の「支配的」な、「富」(財貨)は、昔は「生産物」。「生産→分配→消費」され、「交換」されなかった。原始共同体では「生産物」を直接分配・消費、奴隷制では奴隷は生産手段で「全生産物は奴隷所有者のもの」、封建制農奴は「個人的生産物」を自家消費した。人類生誕から 500 万年、そう暮らしていた。
- ・原始共同体の間で、剰余生産物(余った生産物)を交換し合うことで、「生産物」は「商品」に転化する。
- ・生産が直接「商品生産」であることが、資本主義の最も根源的な特徴であり、資本主義独自の生産様式(三巻 7 編 51 章、岩波 9 分冊 108p)。支配的富は商品。だから、分析は、商品から開始される。
- ★だから、社会主義では、少なくとも「生産が直接商品生産であること」はなくなる。
- ・資本主義社会は、「商品生産社会」という「特殊」な社会。生れてまだ 300 年位なのに、すでに終わろうとしている。
- ・純粋な形態として、「物としての商品」「物質的生产」を分析。他の「役務・サービス」も、これに準じる。

商品は第一に外的対象、その属性で人間の何らかの「欲望を充足させる」一つの物である。その本質は、欲望の性質では変化しない。交換されず直接「生活手段」(人間の消費財:個人消費)となっても、迂路・交換されて「生産手段」(生産的消費)となっても、本質は同じ。(67p)

- ・観念の産物ではなく、人間の「外部」に存在する＝「唯物論」に立つ(観念論・不可知論ではない)。
- ・「人間の欲望」:外的対象を使って(モノに「媒介」されて)満たされる。地球上では、自然界で人間だけが「欲望を発展させるという特性」を持つ。
- ・個人の生活で「個人消費」される生産物を「生活手段」と呼ぶ。社会的に生存に必要なものは「必要生活手段」、奢侈品等は「剰余生活手段」。また、生産で消費される機械や原材料等を「生産手段」と呼び、その消費を「生産的消費」と呼ぶ。生産手段は大きく分けて、「固定的生産手段」と「流動的生産手段」に分けられる。

有用なるものは質と量の二重の観点から考察されるべき。(68p)

- ・使用価値の説明へ。
- ・「有用」は「効用」ともいうが、「モノが持つ人間への性質」。アルコール自身は、「酔わせる」ために存在しているモノではない。注(3):「有用」の属性は物自体にあるが、「有用」にするのは人間。

物の多様な使用方法を発見することは、歴史的行動である。

- ・物から「様々な有用性＝使用方法」という「質」、を発見していく行為は、自然界で特殊に人間だけが行う「歴史的＝発展的」行動。新たなモノの使用方法、また既存のモノの新たな使用方法等。

量を測る社会的尺度を見出すことも歴史的行動である。尺度の相違は対象の性質の相違・または伝習から生ずる。

- ・長さなら「cm・m」「尺・寸」等、重さなら「g・kg」「貫」等。対象や社会毎に多種多様。

一つの物の有用性は、この物を使用価値にする。使用価値は商品自体の属性で、商品体の属性に限定され、商品体なくては存在しない。商品は使用価値または財貨。

- ・すでに古典派経済学が、商品が「使用価値」と「交換価値」を持つことを発見していた。
- ・属性も商品自体も「使用価値」と呼ぶ。

この商品の有用属性は、労働の量によって決まるのではない。また、使用価値は常に、特殊な確定量である。使用価値は使用・消費でのみ実現される。

- ・使用価値は、商品が独自に持つ形や成分や機能という「具体的属性」で、それを作る「労働」は、商品ごとに特殊な具体的工程が問題である。だから、「何時間労働したか」という、労働量では測れない。
- ・欲望を満たす属性だから、「使用・消費」してはじめて実現する。だから「交換後」にしか実現しない。

使用価値は、富の社会的形態の如何を問わず、富の素材的内容である。われわれの考察の対象とする社会形態では、交換価値の素材的担い手である。(69p)

- ・「富」=「人間の欲望を満たすモノ」「豊かさ」。富の社会形態=富のあり方、今は全部「資本の物」。
- ・さらに、資本主義では、「交換価値」の担い手、価値増殖の手段という役割が加わる。
- 人間の目的である使用価値が、「資本の『手段』になる」ことも、物神性の現れ。

交換価値は第一に量的関係。ある使用価値が他の使用価値と交換される比率。偶然的で、純粹相対的と思われがちで、「商品に内在する固有の交換価値」は、一つの背理に思われる。このことを考察。(70p)

- ・「交換価値」の分析へ。ここが厳密詳細なのは、古典派経済学の「労働価値説」の不徹底さと誤りに対する、批判を含んでいるため。商品が持つとされた「交換価値」は、「価値」の現象形態であることを論証する。

「一つの、一定の商品」は、多様な商品と多様な交換価値で交換される。それらは全て、「一つの、一定の商品」の交換価値として、等しい大きさ。だから、①諸交換価値は、全て同一物をあらわしている。(71p)

- ・多様な、さらに「すべての他の商品」と交換価値を持ち、それらは全て、「同一物」、「同じ大きさ」。

しかしさらに、②交換価値は、交換価値とは異なる「内在物」の「現象形態」に過ぎない。なぜなら、「二つの商品」を「等式で表すことができる」のは、二つの使用価値と異なる、「第三のもの」に等しいということ。「全ての多角形」は、「様々な三角形」で表わすことができる。さらにそれらは、目に見えない第三の「抽象的実体」、「(底辺)×(高さ)/2」という共通性を持つ。交換価値も同様に、抽象的実体に規定されている。

- ・「現象=感覚できるもの」は、必然性や法則性を持つ。「存在するものは合理的」(ヘーゲル)。

この「共通なもの」は自然的属性ではない。自然的属性は、商品の形態的属性として現れ、使用価値になる。「商品の交換関係の特徴づけるもの」(第三の別なもの)は、その使用価値からの抽象である。(72p)

- ・共通な「第三のもの」は、自然的属性から「抽象されたもの」。

使用価値は、商品の異なる「質」。交換価値は、商品の異なる「量」で、使用価値を全く含まない。

商品の使用価値を無視すると、「労働生産物」という属性だけが残るが、労働生産物自体も変化している。「労働の有用な性質」も消失・抽象され、「抽象的に人間的な労働」に整約されている。(73p)

・使用価値(有用性)と共に、それを創造した「具体的有用労働も消失」。「抽象的人間労働」が残る。さらに労働生産物を調べると、「妖怪のような」「同一の対象性」、「支出形態を考慮することのない」「人間労働の単なる膠着物」という以外、何も残っていない。これらの物は、ただ、「人間労働が累積されているということ」を表しているだけである。

- ・「妖怪」「支出形態を考慮しない」:具体的に感覚できない・奇妙な・抽象的なもの、という形容。
- ・「対象性」「膠着物」:付着、結晶、凝結。労働生産物が「持っている」。「凝結している」から、物の量として交換され、物に支配される条件を作る。価値は、「モノに結晶している」。

これらの物は、お互いに共通な、この「社会的実体」の結晶として、「価値」・商品価値である。

・価値の説明へ。

・㉞「価値規定 1」:価値とは①「抽象的労働」が、②生産物に「結晶」したもの。(質規定)

・触れられていない「前提」:商品から始めているので「流通」の場の話だが、「価値は生産段階で生産され」「商品が持つ」。価値と使用価値を生産した後で、価値で交換して、使用価値を消費する過程。

・参考:「資本に雇用された役務・サービス労働」:抽象的労働は、物に「対象化」「凝結」せず、「価値」はない。間接的に商品体が持つ「価値」で買って消費するのではなく、「流動する抽象的労働自体を直接商品」として買いながら消費する。「生産・交換・消費過程が同時」。「商品」だが「価値は存在しない」。

★①だけでは価値ではない。社会主義は商品経済ではないから、①が重要な基準として残るが、②の現象がない。総生産物は国民の共同所有であり、「個々の生産物に抽象的労働は結晶しない」。つまり、価値はない。ある生産物・役務は「無償」で支給、ある生産物・役務は「抽象的労働の10倍」で交換される。

商品の交換関係では、使用価値とは全く独立して、「交換価値」が現れる。労働生産物自体の使用価値から抽象すれば、「価値」が得られる。交換比率である「交換価値」に現れている共通なものは、かくして、「価値」である。価値の現象形態である交換価値に後で戻ってくるが、第一に、価値自体を考察する。

・商品が持つとされてきた「交換価値」が、実際には、「価値」の現象形態でしかないことが確証された。

・「交換価値」の「質」は「価値」、「量」は「価値間の比率」、商品が持つのではなく「商品間に現れる」。

「使用価値が価値を持つ」のは、「抽象的人間労働」が「対象化・物質化」しているから。では、価値の大いさはどう測るか?労働の量=労働時間で測る。労働時間には時・日等の尺度標準がある。(74p)

・㉟「価値規定 2」:価値の量は、「抽象的人間労働の労働時間量」で測る。(量)

商品生産に必要な労働時間は、各個人でバラバラだが、価値の実体である労働は、「統一の人間労働」で「同一人間労働力」の支出である。もちろん、個人的労働力はばらつきがある。商品社会の全労働力は、「社会的平均的労働力」として作用し、商品生産では、「平均的に必要または社会的に必要な労働時間」のみを用いるという意味で、「同一人間労働」なのである。

・㊱「価値規定 3」:「抽象的人間労働」とは、「社会的平均的同一労働時間」を支出するという意味での、同一の人間労働力の支出という、抽象である。

「社会的に必要な労働時間」とは、現存する社会的に正常な生産条件と労働の熟練と強度の社会的平均度をもって、ある使用価値を生産するのに必要な労働時間である。(75p)

・㊲「価値規定 4」:「社会的必要労働時間」とは、現存する社会的な、①正常な生産条件、②正常な労働の熟練と強度、という内容での社会的平均である。

・生産方法の変革で、「社会的必要労働時間」が半分に低下すれば、旧来の生産方法で生産した商品の価値も、「市場価値で統一」され、半減する。(「個別価値」と「市場価値」)

★「個別・抽象的労働」と「市場・抽象的労働」:新旧の生産手段で労働者が「同一労働」した場合、「支出した個別の抽象的労働」は同一。しかし、「価値に結晶する際」に、「社会的必要=正常な生産条件」で統一評価されるため、「旧式生産手段の個別・抽象的労働」は「価値が激減する」。資本主義では「労働力を売る」ので、両労働者は同じ賃金を受け取り、資本家が損失を出す。社会主義の場合どうか、原則は「各人が提供した労働から、社会的支給分を除いた分」が「労働所得」。当然、「個別・抽象的労働」で支払われると考えるが、「自主管理社会主義」や「市場社会主義」が失敗した、「市場・抽象的労働」での分配、「所属企業の生産性による差別」という根本原因。

結果、ある使用価値・商品の価値の大いさは、その生産に必要な労働時間である。個々の商品は、「平均見本」で、平均される。この、同一の労働量を含むということで、商品は同一の価値量をもつ。

商品間の価値の比率は、それら商品の生産に必要な、労働時間の比率に等しい。以上の諸規定を前提として、「価値としては、すべての商品は、ただ凝結せる労働時間の一定量であるにすぎない。」

・注(9):「価値は必要労働量で規定される」ことは、1740年には指摘がある。(マルクスの発見ではない)

この、価値を規定する労働時間は、労働の生産力における一切の変化とともに変化する。特に、労働者の熟練度、科学の応用段階、生産過程の社会的組み合わせ、生産手段の規模と作用力、自然的諸関係によって規定される。(76p)

・商品の価値量を決める労働時間は、労働の生産力に規定され、その変化とともに変わる。

一般的に、労働の生産力が大きいほど、一定品目の生産の労働時間は小さく、一品目に結晶する労働量・価値は小さい。だから、商品価値の量は、その中に実現されている労働の量に正比例し、その生産力に逆比例する。(77p)

・生産力が高い＝同一時間で多数生産する＝商品1個が持つ価値は少なくなる。

物は価値でなくて使用価値である場合がある。その物の効用が労働に媒介されない場合は、空気・処女地・自然の草地・野生の樹木等の無償の自然物。

・「使用価値と価値を持つ商品」という、特殊な生産物について。特に、「価値の特殊性」。

・一般的に「富としての自然」は、「土地」に一括表現される。

物は有用であり労働生産物だが、商品でない場合がある。自己の生産物を消費する者は商品を作らない。

・共同体内部、農奴の自家消費、生産過程内部の生産手段、★社会主義での生産物

商品の生産には、使用価値の生産だけでなく、他の人々の使用価値＝社会的価値の生産が必要。

・商品生産は、社会的分業を前提としている。

・社会的分業の前提は、①自分の労働時間以上の「剰余労働時間がある」、②「自分ですべて生産」するより、「分業で専門化」した方が、生産力が高いから。

さらに、その使用価値を欲しがる者に、交換によって移譲されなければならない。

・「生産」した後、「交換」という、「2段階」の過程がある。

最後に使用価値ではない、効用のないものは、労働も効用がなく労働のうちに入らず、価値を形成しない。

★ソ連時代の「使い物にならない生産物」の山:社会主義でも、「使用価値」基準の共同生産が必要。

★「西欧マルクス主義」は、たとえば、旧社会と資本主義の商品を「別物」と考える。「価値法則」も「資本主義だけ」の法則と考える。だから「旧社会は資本主義社会と必然的關係はない」、歴史の必然的な発展法則はないことになる。「階級闘争」「唯物史観」も否定される。

一例:モイシェ・ポストン(自称フランクフルト学派の末裔)は、明確に、「マルクスは、労働量を基準とする価値法則は、資本主義的商品経済だけの法則と考えていたのであり、過去の歴史上の商品経済とは全く関係ない。」と述べる。マルクスは随所で歴史性に触れているのに、それを無視してまで公然と言う。

第二節 商品に表された労働の二重性

以上に示したように、商品に含まれる労働の二重性は、マルクスが初めて批判的に証明した。これが跳躍点で、経済学の理解が可能になるのだから、この点を吟味する。(78p)

・商品の二要素(使用価値と価値)に対応して、商品生産労働自体が、「使用価値を作る労働」と「価値を作る労働」、の二重性を持つ。古典派経済学は、商品の二要素を発見し、「労働が価値源泉」とであると推論したが、「労働の分析」ができず、「異なる質の労働量」で価値を説明しようとして失敗した。

・「労働の二重性」の発見は、「剰余価値の発見」と同様に、重要な理論である。

・1節の対象は「商品に含まれる労働」だった。2節での対象は、「人間労働それ自体」。

各商品は、「特別の欲望」を充たす一つの使用価値。使用価値を生産する活動は、その目的・作業方法・対象・手段・成果に規定される、この労働は「有用労働」と呼ぶ。この労働は常に、その利用効果と結びつけて考察される。

使用価値が質的に異なるように、その存在を媒介する(産み出している)労働は質的に異なる労働であり、そうでなければ同じ生産物が生産されるが、同一使用価値どうしは交換されることはない。(79p)

・質的に異なる使用価値を生産する、質的に異なる「有用労働」という、労働の一面。

使用価値の、属・種・科・亜種・変種等の違いに応じて、種々に異なる有用労働の総体があり、それが社会的分業である。それは商品生産の存立条件である。しかし、商品生産は社会的分業の存立条件ではない。

・有用労働が形成する社会的分業と、商品生産社会との関係。

・「社会的分業」: 国民経済レベルで、労働者が専門職となり、社会が職業別の集団に分かれていくこと。

・76p記載のとおり、商品は「他人の使用価値」。であるから、絶対に社会的分業が必要。

共同体内分業や工場内分業は「労働を分割する」が、「個人的生産物を交換することに媒介されていない」。つまり商品に媒介されない。商品として相対するのは、「独立に分離した私的労働」の生産物だけ。(80p)

・商品生産の根本的成立要件は、①社会的分業の下での、②私的所有による生産(独立・分離生産)。

・共同体内分業に商品媒介が不要なのは、生産前計画で、「個人の労働」が「直接」、社会的有効性を持つ、個人の労働が「直接に社会的労働となる」ため。市場で生産物の有効性を判断する必要がない。

したがって、次のことが明らかになる。生産物が一般的に商品となる社会＝商品生産社会(資本主義)では、独立・私的に行われた有用労働の質的な相違は、多岐に分かれた労働体制＝社会的分業に発展する。

・商品生産社会での、「独立・私的」という条件が、有用労働を社会的分業体制に発展させる。

だが、使用価値がどう使われるかは、使用価値にとってはどうでもよく、ただ、使用価値として作用するだけである。それと同じく、使用価値とその有用労働の関係は、その労働が職業として「社会的分業の一つになる」ことで変化することはない。有用労働は、その使用価値を生産する活動でしかない。

・しかし、「発展」するとはいっても、使用価値は効用として作用するだけ、多様な有用労働も使用価値を創るだけで、そこには何の変化もない。

着物を着るといふ欲望が人間にあるかぎり、人間は、ある男が裁縫職人となる以前に、幾千年の永きに渡って(自分で)裁縫した。

・社会的分業(や商品生産社会)以前から、人は有用労働を、自分でやってきた。だから、有用労働は、「人間の『欲望』が人間に強要する」直接的関係＝本質的關係によるもの。社会に媒介されない。

・「社会的分業の発展」は、個別の「有用労働」には関係ない。商品経済・商品生産の欲求。

しかしながら、上衣・亜麻布等、自然に存在しない素材的富のあらゆる要素が現存するには(現在の全ての使用価値が存在するのは)、「特別な人間の要求」に「特別な自然素材」を同化させる「特殊な目的にそった生産活動」(個別特殊な生産工程を伴う有用労働)に媒介される必要がある。したがって、使用価値の形成者として、「有用なる労働」は、すべての社会形態から独立した人間の存立条件であり、人間と自然との間の物質代謝を、したがって、人間の生活を媒介するための永久的自然必然性である。(81p)

・「社会的分業発展とは関係ない」とはいっても、「有用労働」は超歴史的な「人間の根源的活動」である。

・元来、人間の労働は、「生産物(使用価値)を生産する労働」＝「有用労働」である。

・人間は本性として、「発展する特別な欲望」を充たすために、「特別な自然素材」を利用して、自然には存在しない多様な「富」を実現した。そのために、特殊な目的のために自然物を加工する「有用労働」に、常に「媒介」される。だから、「有用労働」は、本来、社会とは関係ない、「根元的な人間性」である。「有用労働」はまた、「人間と自然との間の物質代謝」に必要な(媒介する)、永久的自然必然性である。

★自然的必然性と社会的必然性:「人間の自然的必然性」である有用労働。それが生産する使用価値を消費するのが、自分なのか他人なのか、有用労働を行うのは自分なのか他人なのか、という問題は、時の社会体制で決定される「社会的必然性」。そういう認識だろう。商品生産社会が強烈に社会的分業を広げ、有用労働は無限に拡大する。「社会的必然性」が、「自然的必然性」を強烈に開花させる関係にある。

★本源的な「有用労働」の重要性:資本の分析書であり、この後は「価値論」が中心テーマとなっていく。しかし、人間にとって本来重要なものは、「使用価値」であり「有用労働」であることを示している。マルクスがマクロ的な視点で「人間の歴史」を見る際、重要な基盤としているのは、歴史上特殊な短期間だけ出現する「価値」ではなく、本源的・永久的な「使用価値」「有用労働」である。

使用価値、また商品「体」(生産物)は、自然素材(自然に存在する物質的基盤)と労働という二つの要素の結合である。人間は、生産を、「自然がやっているようなやり方」、すなわち「素材の形態を変更する方法」でしか行えない。さらに、自然力の助けを借りる。労働は、使用価値・素材的富の唯一の源泉ではない。労働はその父であり、土地はその母である。

・「自然」も変化発展する歴史的存在。人間は、自然科学の「自然法則」や「素材」を、生産労働に応用することでしか、「自然界に存在しない物」を創造できない。さらに「水力・馬力」等の自然力も利用する。

・富の源泉は、「有用労働」と「自然」である。他方、価値の源泉は「抽象的労働」だけ、非人間的。

商品価値に移る。異なる商品が同一の価値量を持つから、価値は、同一実体で、同一性質の労働の客観的表現である。それは、同じ個人が二つの有用労働を交互に行う場合の、同一の個人的労働の変化と同一である。また、資本主義社会で、労働需要の変化により、一定分の労働が異なる有用労働に費やされるのと同じである。(82p)

・価値は、抽象的労働の「客観的表現」(外部の物に結晶)。それは、「主体的表現」として、1個人が行う異なる有用労働、労働者を雇用した資本が行う一定労働での複数商品生産等と同じこと。

生産的労働の特定性・有用性を見ないとすれば、労働に残るのは「人間労働の支出」ということである。両者とも、人間の頭脳・筋肉・神経・手等の生産的支出である。どの形態にも支出できるためには、人間の労働力は多少とも発達していなければならない。しかし、商品価値は、人間労働一般の支出を表している。この労働は、普通の人間が特別の発達もなく、平均して持っている単純な労働力の支出である。(83p)

・どの形態にも支出できる＝どの「有用労働」にも支出できるには、労働力の発達を必要とするが、抽象的労働はそうした有用性と関係なく、全商品価値に対象化している。

単純なる平均労働は、国・文化時代にしたがって、その性格を変えるが、現にある一定社会内では与えられている。複雑労働は複合された単純労働で、単純労働の一定量を表す。こうした整約が行われていること経験が示している。単純労働を尺度単位とした、こうした整約は、生産者の背後の社会的過程(流通・労働市場)で確定されるから、生産者にとっては慣習で決まると思われる。以下は単純労働を前提にする。(84p)

・抽象的労働の「質」は、時々「社会的」な平均労働に規定されている。

・複雑労働の尺度は「単純な抽象労働」であり、その倍率で計算される。

・現実的には「賃金差」として現れる。理論的計算はほぼ不可能。

価値に表される労働は有用労働から抽象されている。「抽象的人間労働」という同じ「質」をもつ。

価値の「量」的な相違は、時間継続が問題で、労働の一定量を表している。

・抽象労働の量は、「労働時間」で計算される。

より大きな量の使用価値は、より大きな素材的富を表わす。1着の上着は1人しか着れないが、2着ならば2人が着れる。だが、素材的富が増大するのに対しては、その価値の大いさが同時に低下することが相応じる。この相反する運動は労働の両面的性格から生じている。(86p)

- ・一方で富が豊かになるのに、他方で総価値量が同時に低下することがある。こうした反比例する動きは、有用労働と抽象的労働という、労働の二面性によるが、それは以下のとおり。

「生産力」は、つねに有用な具体的労働の生産力である。それはある期間の、目的に応じた生産的活動の作用度を規定している。だから、生産力の増減に比例して、その源泉である有用労働の量も増減する。

- ・まず、生産力は、常に有用労働・使用価値の生産力で、その一定期間の生産活動の大きさ、を指す。

しかし、生産力の変化は、価値に表される労働には、少しも影響しない。生産力は労働の具体的な有用な形態が持っているものであるから、そこから抽象された労働には影響しない。

- ・新しい生産手段等により生産力が増加すれば、有用労働量と使用価値量は増加する。しかし、新生産手段の導入が、直接に労働時間の増減を条件にすることはなく、抽象的労働時間は影響を受けない。

従って、抽象労働は同一期間に、生産力がどう変化しても、常に同一の価値を生む。しかし、生産力は、同一期間に違った量の使用価値をもたらす。(86p)

労働の生産度を増大して使用価値量を増加させる場合に、この生産力の変化が、もし生産に必要な労働時間の総計を短縮するならば、この増大した(使用価値)総量の価値量を減少させる。逆の場合は逆。

- ・しかし、新生産手段を稼働させる労働者数を、これまでの半分にする(それ以上の使用価値生産は過剰)等、間接的に総価値量が減少する場合がほとんどである。

★社会主義経済では:生産力増大の2つの効果:①消費財の充足、②労働時間の短縮

全ての労働は生理学的意味における人間労働の支出である。そしてこの同一の人間労働、または抽象的に人間的な労働の属性で労働は、商品価値を形成する。そしてこの具体的な有用労働の属性において、それは使用価値を生産する。(87p)

★参考:「資本論」の構成

○巻・編

巻	編
1.資本の生産過程	1.商品と貨幣 2.貨幣の資本への転化 3.絶対的剰余価値の生産 4.相対的剰余価値の生産 5.絶対的剰余価値と相対的剰余価値の生産 6.労働賃金 7.資本の蓄積過程
2.資本の流過程	1.資本の諸変遷とそれらの循環 2.資本の回転 3.社会的総資本の再生産と流通
3.資本主義的生産の総過程	1.剰余価値の利潤への転化と剰余価値率の利潤率への転化 2.利潤の平均利潤への転化 3.利潤率の傾向的低下の法則 4.商品資本および貨幣資本の商品取引資本および貨幣取引資本への転化(商人資本) 5.利子と企業者利得とへの利潤の分割。利子付き資本 6.超過利潤の地代への転化 7.諸収入とその所源泉

○巻別の主な「テーマ」と主な概要

第一巻	※資本主義以前からの「商品流通・商品経済」	根元の「価値法則と生産過程」、「使用価値＝人間と価値＝資本」
	※「個別資本」の「生産」	「搾取:必要労働時間と剰余労働時間」、「物神性」:モノ(資本)の目的化・人格化、人間の手段化・物質化(道具化)
第二巻	※「個別資本」の「流通」	貨幣資本・生産資本・商品資本＝産業資本、不変資本(固定・流動)と可変資本
	※「総資本」の「国民経済の再生産(表式)」	回転、再生産表式:マイクロでは無政府性だが、マクロでは国民経済再生産
第三巻	※「総資本」の「展開」	剰余価値→利潤→平均利潤、貨幣→通貨、利子、3階級:資本・地主・労働者
	※資本主義の限界とその兆候	平均利潤の傾向的低下、資本の限界、株式会社と労働協同組合

<唯物史観について>

★なぜ「生産力は発展し続けるのか」: 人間は社会の中で発展させた「欲望」を「充足させようとする」。その結果、「社会の生産力は発展し続ける」。つまり「生産力の発展」とは、「人間は発展せざるを得ない」という主体的条件の、客観的結果である。唯物史観が歴史の原動力としている「生産力と生産関係の矛盾」という根本命題は、発展しようとする「人間とその時々¹の社会的生産関係との矛盾」ということである。

★「発展する社会的個人的欲望」: 発展のための人間側の原動力は、「欲望」。社会生活の刺激で「新たに発生」する。しかし、必ず「個人の精神」の中にしか発生しない。価値のような抽象的社会的な実体ではない。「社会的欲望を満たす」ということは、「社会成員全員の個人的欲望を満たす」こと。だから、人間解放は必ず「個人的解放」という現象になる。ただし、「個人が社会的」である前提。

★なぜ「下部構造が支配的」なのか: 経済が最優先なのは、「生存の必要」が最重要テーマだから。生きることが難しい、その根本の足かせは、「自然条件からの支配」。人類はまず、「自然条件からの解放」を類としてやっている。ただその人類のやり方は、「皆で少しずつ良くなる」方式ではなかった。「一部が解放」されるために「多数者を働かせる」方式だった。人類は「社会条件からの支配」という第2の足かせを持つ。発展した資本主義は、その生産力で「自然からの解放を完成させた」、が、「第2の足かせ」が残っている。第2の足かせから解放された場合、「下部構造は支配的ではなくなる」。

★「経済」とは何か: 自然支配からの脱却のため、必死で働き生産力を上げようとする人類。「生産力を上げる」とは、「より少ない労働時間で必要生産物を作る」こと。分業も固定資本の開発も、「労働時間を少なくする」ことを目指している。「結局すべての経済は『時間の節約』である」(『経済学批判要綱』)。極力働かないで必要な生産物を手に入れることが、「自然からの解放」である。

★社会主義での人間: 自然条件の支配、社会条件の支配からは解放されている。共同労働をする前提で「生存のための生産物は充足している」、「他人のために働く時間から解放された」。彼らは、「十分な消費財」と「十分な自由時間」を持ち、『経済』を終え、本来の人間発展に向かうことになる。

<労働価値説以外の価格理論>

①需要供給説

- ・価格決定: 需要と供給それぞれの増減によって、価格は上下する。両者の一致点が「自然価格」
- ・問題: 商品ごとに価格変動する価格帯が異なることを説明できない。明らかに生産費が関連している。
- ・近代経済学の基本的価格理論。

②生産費(コスト)価格論

- ・価格決定: 「生産費+利潤」、さらに「(生産費+減価償却費+賃金)+利潤」
- ・問題: 価格の説明の前提に「生産費という価格」が必要。何も説明してない。儲かるから生産するだけ。
- ・財界、経団連が依拠する理論。「コスト・インフレ」「生産性基準原理」等の原論。

③限界効用価値説

- ・「価値」: 商品から得られる人間の満足度である「効用」の大きさを「価値」と考える。使用価値と混同。
- ・価格決定: 2つの商品の「効用」が一致した点で価格が決まる。
- ・問題: 「主観的な満足度」という「効用の大きさ」、が計測できない。
- ・メンガーを祖にオーストリア学派、他にワルラスの一般均衡を祖とするローザンヌ学派。